小精廬雜話 大正十三年二月以降

圖讀錄資料

其二

特別
14
1919
761

1765,H

14
1919
761

176910

38ニ 9462

明治文化發祥の回顧

滑稽のかずかず

市嶋謙吉

はしがき

明治以來の文明の推移に就き、追懷談をすることは案外困難である。何故なれば、明治となると、もはや、かなり西洋文明が具體的になつて來てゐるので、その移り變りを考へて見ても、突飛に人の耳目を惹くやうなものは既になくなつてゐて、漸次に移り遷つてゆく頃であるので、特にきはだつた物などもしたがつて尠いのである。それ故、この推移の模樣などをいくらか面白味のあるやうに話すことは、一寸むづかしい。しかし、いろいろ思ひ出づるままに語つて見よう。けれども、これは沿革的に文明の推移を語らうとするのではなく、明治の初年、まづ九年頃までの間に、西洋文明が日本に入つたとはいへ、まだ充分にそれが消化されぬその間に、いろいろの滑稽味のある事や、今日から考へれば兒戲に類するかの如き感のあるものを主なる材料として、聊か語つてみよう。

一

幕末に亞米利加の軍艦が日本へ來て、當時日本の大官がその艦の招待を受けたことがある。當時の日本の禮服は例の衣冠束帶、卽ち今の神官の服裝の如きものを着して艦に臨むだわけである。

この時に當つて日本の外國通が三ケ條の注意書を棧橋の入口に墨黑々と書きつけて貼り出した。その第一は艦の中はペンキがまだ乾いて居らぬから、狹い場所を歩く時は袖の觸れぬ樣注意せよといふこと。第二は、艦の中には壁の代りに大きな鏡が裝してある、その鏡に映る自分の姿に驚いてはならぬ。且つそれに突き當つてはならぬといふこと。それから第三は、日本の禮式では饗應に出た食物を紙に包んで持ち歸るのが例であるが、斯樣なことをしてはならぬといふ意味が書かれてゐたのである。當時日本の大官が外國の風俗に就て如何に幼稚であつたかゞ窺はるゝであらう。

二

明治になつてからの風俗上のことに就いて一二の話柄をあげると、斷髮令が出た時に、自分のごときはまだ少年であつて鄕里越後に居つて頻りに漢學を學んでゐた頃であつた。その頃新潟縣令として、楠本正隆氏がやつて來た。此人は非常な文明鼓吹家であつた。從つて盛に斷髮を奬勵したのであるが、その手段として、縣下に知られてゐるやうな家柄に向つては、模範的に斷髮をさせて、これを以て一般に對する斷髮奬勵の材料としたのである。私の家などへはわざわざ役人を派遣して、是非卽座に髮を切れといふわけで、否應なしに役人の目前で斷髮をさせられたのであつた。中には髮を惜んで躊躇した者もあつたが、これは年の長じた人たちのことで、自分などは喜んでこれに應じた。その理由は、當時の髮を結ふ爲には隨分煩らはしく、櫛で頭の痛むほどスクやら油をつけるやらするのが苦惱で、髮を結ふことは避けられるだけ避けようとしてゐた位であつたからである。それ故に喜んでその命に從つたが、父から褒美として帽子を與へられたのが嬉しかつた。

楠本縣令で思ひ出したが、此人が越後へ赴任した時の事である。勿論當時は汽車もなく、人力車もなく、清水峠といふ

難所を經て來た楠本氏自身、當時奇なことがあつたと云つて或る時語られたことがある。氏は徒歩で此の峠を上つて、汗だらだらで絶頂の茶屋に憩ひ、水を求めて飲まんとする時、カバンの中から炭酸マグネシアを取り出して、それを少し茶碗(勿論コップなどは無かつた)の中に入れて水を注がせると、渦を卷くやうに沸騰したので、茶店の主人はこれは魔法使に違ひないと驚いたといふが山間の僻地で驚いたのも無理は無かつた。

三

戊辰戰爭の時、後に陸軍中將となつた三好といふ人が官軍を指揮して越後に來た。その人の書いた手紙を自分は所持してゐるが、その手紙に當時の樣子が偲ばれることが書かれてゐる。それは用度係長に送つた手紙で、寒冷紗で作つた筒袖を二百ばかり至急送れ、雪中で戰ふには黑の筒袖では、敵の彈丸の的になる樣なものであるから、羅紗の筒袖の上にこれを着ける必要があると書かれてゐるなど滑稽である。

明治の草創にはまだ廢刀令も出なかつたので、今の帝國大學の前身である大學南校などには、學生は多く士分から拔擢されて出てゐたから、外人教師に就て學ぶに皆な各自脇差を帶びて、講堂に臨むだことである。西洋人が無禮な言でも吐けば中には刀を按じて質問を試みるといふ連中もあつた。

四

新聞紙などは割合に早く出來た。しかし極めて幼稚もなのであつたが、とにかく慶應の頃から出てゐる。その形式は今の雜誌のやうなもので、半紙を二つ折にして五枚乃至十枚を綴つたのが多かつた。今のやうに一枚物にした最初のものは、日本紙で西の内位の大きさなものであつた。東京日々新聞の初號などそれである。

その書かれてゐる事柄は官令やその日その日の出來事、市井の瑣事などで、甚しきに至つては某風呂屋に何々の忘物があるなどいふことまでも書かれて、幼稚なものであつた。

半紙二枚折の新聞が幾種となく出て來たなかで、面白いと思つたのはそれに小さな字書が添はつたもののあつたことである。その字書には難解の字に註解を施し、新語には特に説明を加へたものであつた。その字引は現に早稻田大學の圖書館に二册ばかり藏してある。

昨秋の震災前まで殘つてゐた京橋角の讀賣新聞社の建物は、例の煉瓦造りで明治の初年は餘程立派に見えたらしく、田舍の赤毛布連は其の入口の樣子や受付のアンパイが神社に似てゐると思つて受付にお賽錢を投げこんで、拜をしたものもあつたといふとだ。自分もこの新聞には關係があつたが、その當時創立に關係のあつた人の話に聞いたところに依ると、當時新聞の配達をすることも甚だ簡單で、事務員が夕刻歸へりがけに幾枚かの新聞を携へて途中配達をし、或は翌朝配達したこともあつたといふ、今からみれば珍談である。

また尾崎咢堂氏が一たび主筆たりし吾鄕國の新潟新聞を見るに、種子切のためでもあつたか、社説として世界の英傑傳を數十日連載してゐたことなどもあつた。また犬養木堂氏が秋田の新聞の主筆をやつた頃、社説に西洋の學者をいろいろ引き合に出したのを、よく讀んで見ると、それが西洋料理の名からひねり出したオムレツト氏曰くだとか、プランデー氏曰くなどいふ出鱈目であつて今から見れば噴飯に價することで滑稽を極めた。

五

明治六年、郵便の元祖である前島男爵が、郵便の機關として「どうしても新聞がなくてはならぬ」といふて新聞を發行したことがある。全體男爵は極端なる文明論者で「慶應二年あたりに既に漢字廢止を主張し」時の將軍にまで建白した位であつた。その人が新聞を出したのであるから、いきほひ假名書を主義とする新聞となることも首肯かれるのである。

即ち明治六年二月、神田淡路町の啓蒙社から發行させた新聞は「毎日平がな新聞」といふので、半紙二つ折、三枚位が一號となつてをるもので、而もその全文が偏平體の平假名ばかりで印刷されたものである。一時萬朝報などが使つてゐた平がなの字體と同じ型の活字であるが、全文がすべてその假名書であつたのである。それは一には假名のみで書くために、語を組むことの上から殊更に偏平の活字を鑄造したといふことは當時に於て非常な創意といはなければなるまい。これなどは決して幼稚なものと云ふことは出來ぬ。むしろ時代に先んじた擧とも云はねばなるまい。

然し漢字を廢すといふことは今日に於てすら出來ぬ位のものであるから、かかる目新しいものは人の珍重するまでには至らず、折角かうした主意のもとに起された新聞もあまり長くは續かなかつた。何號まで出たか知らないが、自分のところにあるのは第十號である。

ついでに活字のことに亘つて云ふが、活字の働をはじめたのは明治よりずつと以前で、慶長あたりに始つてゐるが、維新後に至つては無論盛に用ゐられた。全體活字といふ名を誰がつけたか知らないが、一つ一つの字を嵌めていろいろに組むことが出來る、その轉換が活字の特徴であるといふことからして、一の惡い癖を生じた。それはよい加減な原稿を活版所へ回はしておいて、校正の時にうんと直すといふ癖が、今でも改まらず、活版所がそれで苦しめられてゐるが、西洋では校正が出來てから、著者の方で直す時は手數料を取ることになつてゐる。しかし日本では活版だから、直すのが當然とあつて、加藤弘之先生などは脫稿に至らない草稿を回しておいて組んでから縱横に直された。先生に云はしむれば、直すことが出來るから活版といふのであつて、活の字はそこに意味があるのだと云はれた。

六

明治の初年にヘボンの英和辭典が出來た。これは英學者に非常の便を與へた。政府でもこれを奬勵して二千部丈買上げた。大隈侯のもとに遺つてゐる文書によると、大學南校で此二千部を買ひ上げるに就て、此の字書の可否に就てはボアソナードの鑑定を經たとある。いくら便利のものでも、當時二千部賣ることは容易で無かつたので、政府が奬勵的に買上げたと見える。

その頃バタビヤで出來たポツケツト日英辭書を飜刻したが、ポツケツトとあるから、袖珍と譯したは無理もないが、それが日本紙で五寸もある厚さの本で尨大のものである。なかなか懷中など出來兼ねるものであるのにポツケツト、デクシヨナリーだからと云つて正直に之れを懷中したものもあつた。

玆に又字書に就て一笑話がある。前島男が英學者として薩摩藩に教師として迎へられた。藩では大學者として尊敬を拂つた。或る時藩では大切な寶物を見せるから禮服で出頭せよといふから、男は禮服を着けておごそかに出頭に及ぶと、「濫りに見せるものではないが、學頭であるから特別に見せるのだ」といふて、箱に入れてあるものを持ち出して來た。それが二三重の箱に丁寧に納めてあつて段々開いて見ると立派な帛紗に包まれたものが出た。それは何かと思ふとウエブスターの大辭書であつた。その頃にはもうウエブスターの辭書は珍しいものでもなかつた。然し薩摩では餘程前に外人から贈られたので、これを大切にしたのである。まだ何處にも無かつた時分外人から寄せられたから大切にしたのも無理はないが、前島男も吹聽が餘りエラかつた爲め、見て一笑を禁じ得なかつたといふ。

七

明治の初年は禮服の制はまだ舊式であつた。自分の鄕里に新潟英學校が出來たのは明治五六年頃であつたと思ふが、最初英學の敎頭として迎へた人は關信八と云ふ英學者の門下生で、後に仙臺から代議士に擧げられた首藤隆三氏であつた。その人が聘せられて、新潟の秋田屋に泊つてゐると縣廳から差紙が來た。これには明日何時に裃着用で出頭せよとあつた。書生あがりの英語の先生もとより裃の持合はない。と云つて明日に迫つてゐることなので、宿屋の主人に計つたところ、丁度宿に義太夫語がゐるからその裃を借りて行かれたらよからうといふので、それに從つたが、その裃は黑天鵞絨で金で紋を刺繡したものであつたが、それを憶面もなく着用して出頭したなどは滑稽である。縣廳では縣令が辭令書を芝居でするやうに半ば懷中から出してゐるといふ有樣で御上使そつくりであるのに、首藤氏も流石に夢心地であつたといふ。

※ ※ ※ ※ ※

勝海舟翁が僅かに百三十噸ばかりの船で西洋まで出かけ、それが無事に日本に戻つたと云ふが、今思へばこんな船は日本の近海を渡る漁業の船位のものだ。それを以つて大膽にも、西洋まで行つて歸り得たなどは如何にも奇蹟であるが、ま

た大膽不敵とも云はねばならぬ。むしろこれは僥倖といふべきで、西洋人をして之を評せしめたならば實に無謀と云ふべきであらう。

八

此處に一つ面白い話がある。かつて明治の初年住友家が別子の銅山に外人を雇入れたことがある。それはラロックといふ佛人で、これが神戸に來てゐた。此人が鑛山のとに精しいといふので、これを雇入れることに決したが、さて四國の伊豫まで行くのは勿論海を渡らねばならないが、此外人は和船は危險であると云ふてどうしても乘ることを承知しないので、住友家は之れには當惑した。當時は住友家の事業も振はない時分で、汽船を買ふ資金も無かつたが、已むなく無理算段をやつて或外人の持つてゐた小蒸氣船を一萬六千圓で買上げて「やつと此の技師を赴任せしめたといふが、これには困つたと當時住友家の總理番頭であつた廣瀬宰平氏がその自傳に語つてゐる。

九

明治十三四年頃のことであつたと思ふ。和蘭文明の輸入に大功のあつた大槻磐水翁の歿後五十年にあたるといふので、その頃八十に近かつた磐溪翁が追悼の會を開催した。その時の趣向が面白いものであつた。先づ客として招いた人は一度蘭語の字典を手にしたことがあるものに限られた。それに合格の人は五十人あつて、それが皆な當時洋學の耆宿とも云ふべき大家であつた。箕作麟祥や西周や西村茂樹や中村敬直や福澤諭吉や神田孝平などと云ふ歴々が悉く網羅された。日本人の外にはニコライやシーボルト(二世)などいふ人までも加はつた。シーボルトは差支で來なかつたがニコライは臨席して演說した。その斡旋役が福澤諭吉、岸田吟香などで、會場はすべて西洋式の裝飾をほどこし、洋式の飲食物を供し、

餘興としては陸軍の軍樂隊を招いて奏樂をやつた。陸軍の軍樂隊はその頃までは民間の依頼に應ずる事はなかつたのであるが丁度この會を開く時から、民間の聘に應じ得ることになつて、これが其の第一回であつた。萬端の趣向がハイカラであつた上に、岸田吟香は宴會なかばに西洋の例に倣つて盆を會衆に持ち回つて樂人にやる祝儀としての卽座の寄附を募つたなども今日以上のハイカラであつた。

その時ニコライが立つて演說をした。ニコライは、その會より十五年も遡つた幕末に始めて日本へ來た頃のことを語つた。初めて來た當時は、日本には如何にも不安の空氣が漂ふてゐて、外出しても薄暗いやうな氣がして自由に呼吸も出來ず、氣づまりのするのを感じてゐたが、それが次第に日本の開けると共に呼吸をして一向氣づまりを感じない、如何にも愉快な天地になつたといふ感想を述べ、これも畢竟磐水先生の如き文明の學者が非常に努力された其の結果が今日に現はれたのだといふ祝辭を述べた。この祝辭は簡單ながら文化の推移をよく表はしてゐるやうに思ふ。

一〇

なほまた少しく遡つて京濱間に鐵道の敷かれた時のことに及ぶのだが、その開通式には天皇陛下の臨幸があつた。その臨幸に就て宮內省では鹵簿に就て工夫を凝らし、幸ひその前英國から馬車が獻上になつてゐるからこの機會に召されるのがよからうといふことになつた。然し馬車はまだ初もので、御者もないので困つたが、兎に角馬の名人をその任に當てるがよからうといふことになつて、馬の名人某を以つて御者とした。然し御者で羽織袴も具合が惡いが、と云つて何ういふ服を着けてよいかもわからなかつた。然るに誰やらが御者の着るべき服を探し得たと云ふのを見ると、胸邊左右に肋骨形の羅紗で裝飾のある服で、なるほど圖などに見る御者の服裝に似よつてゐるといふて、それを着せて御者臺に座せしめたが、心ある外人は之れを見て祕かに笑つたのも無理はなかつた。此服は西洋人の寢卷であつた。それがヲークションに出

てゐたのを購つたと知れてゝ皆々大笑ひであつたといふがゝ陛下も後に侍従よりこれを聞召されゝひどく興に入らせられ後年まで時々此の事を御追懐あつて御笑ひな[illegible]つたと承る。

また御者になつた人の語つたところによると、あの時ほど困つた事はない。馬を扱ふことは知つてゐるが車につながつてゐる馬を扱ふことは初めてである。さしてうしろには玉體、前には獣といふ其の中間に挾つてゐる自分は全く閉口して満身汗を流した。然し僥倖にも何等蹉跌もなく濟んだのは全く天祐であつたと語つたといふが、さもありさうなことだ。

二

千葉縣下銚子の犬吠岬に燈臺が設けられてゐる。卒然考へると、日本も早くから適當の地形に燈臺を置いたものだと思ふかも知れないが、實は日本が考へた自發的のものではなく、外人に對する謝罪の意味で建てられた云はゞ不名譽の紀念碑のやうなものである。大隈侯が參議時代に、此の燈臺が出來上つて巡視された。その時には外人も同船して隨行したが、外人は讃岐の毘比羅、伊勢大廟を拜したいと大隈參議に請ふた。毘比羅は兎も角も大廟は當時外人の參拜を許さなかつたので、これには大隈侯もちよつと考へられた。大廟にはおごそかの規定があるので、大隈參議は外人に向つて君等に我國の最敬禮が出來るか、それは跪いて拜をするのであると云はれた。外人は稽古をするから、是非と頼むので、それならばと破格に伴はれた。その時跪くことに慣れない外人は拜をする時に皆な後ろに仆れたのでおかしかつたと大隈侯は語られた。

此頃廢娼令が出て間もない時であつた。伊勢にはそれまで遊女の踊る伊勢音頭があり、それが呼び物となつてゐた。外人は之れを見たいと云ふので大隈參議は或る樓へ伴はれたが、最早廢娼令のもとにさういふ家には娼妓が置かれてゐなかつた。ところへ縣令みづからこれらの人たちを案内して行つたので、廢娼令を布いてゐながら斯樣な踊を見たいと云ふのは怪しからんと、娼樓の主婦が縣令に喰つてかゝつたと云ふ珍談もある。

三

以上の如き話柄を考へおこせばいろいろ思ひ出されるが、玆に少しく文學上のことに渉つて語つて見よう。明治の初年

は新らしきを競ふと云ふ風があつて、意外な人が意外の事をやつてゐる。横山由清や黒川眞頼などいふ人は何れも國學の大家であつたが、前者によつてロビンソン・クルーソーが譯されたり、後者に據つて羅馬字の單語の本などが出版されてゐる。亦漢學と西洋學兼備の中村敬宇翁はスマイルスの自助論を反譯した。これは前二書とは違つて非常に流布し、今でも原書は諸學校の教科書になつてゐる。必竟反譯のお蔭であるとも云へやう。スマイルスの此書は西洋ではそれほど重く用ひられてもゐないのに長く日本に珍重されてゐるのを西洋人が不思議に思つてゐるといふが、全く譯者の人格と文章とが重からしめたのである。此の西國立志篇の或部分は芝居にまで仕込まれ、上方筋では舞臺に上ぼしたこともあつて、其脚本は繪を挿み三册ほど出版されてゐる。此書が文學上ばかりでなく、倫理上にも相當の力のあつたことが認められる。

此外當時大いに世に行はれた反譯書を數へたてると種々ある。内田の「輿地誌略」だの、加藤弘之の飜譯にかゝるブルンチリーの「國法汎論」だの或はモンテスキューの原著「萬法精理」だの、中江兆民の「美學」などいふものは皆な廣く讀まれた。これらの書は、それぞれの原理を説いたといふやうなもので、當時世界に流布されてゐた最も名高い著述が比較的よく飜譯されて世に表れた。而もそれが或る知識階級の間に大いに讀まれたのである。就中日本に於て一時しきりに歡迎を受けたものはハバート・スペンサーの「進化論」と「社會學」とであつた。一體進化論といふものが、日本に非常に興味を以て迎へられたのであつたが、就中スペンサーの進化論に關する書が最も盛に讀まれたものである。著者のスペンサー自身でも、日本のやうな國に大得意が出來たといふことは不思議であつたと云はれた位で、スペンサーでなければ夜が明けない時代もあつた。

その後、歐化主義が盛に行はれ、當時の外務省の附屬であつた鹿鳴館、(即ち今の華族會館)に、外人と邦人とが携へて踊つたりはねたりして懇親の關係を結ぶことに馳せた頃、或る夜會に假裝舞踏會が催され、時の大臣後藤、井上、西郷(從道)なんどいふ人たちが、みな種々な、思ひもよらぬ人物に假裝したりして、外人と交はり、盛に西洋の眞似をやつた。

その頃からだんだん外人の内地雜居といふやうなことも考へねばならぬ樣になつてきたのであつたが、しかし一方に於ては、一體外人を日本へ連れてきて雜居し、且つ雜婚をするといふ樣になるならば、その結果は果して如何なるものであ

ことになつて、時の當局者が内々スペンサーに尋ねたことがある。ス氏は徹頭徹尾進化論から斷定を下す人であるので、雜居はよくあるまいと答へたのであつた。進化の原理からいふと、優等の國民と文化のおくれた生活程度の低い國民との混合は、優等の國民の血が勝つて、その血の壓倒を受けるといふ卒直な答を受けたのである。歐洲の文化に心醉した當局者が少しくこれには驚き、歐化主義には二の足を踏むやうになつて來た。これに見ても如何にスペンサーが我國に尊敬を受け、その學說が朝野を風靡してゐたかがわかる。

一三

その當時の日本に於ける新しい文學といふやうなものは、今から見れば甚だ幼稚なものであつた。西洋の小說などが追譯されて世間に現はれたが、第一小說といふものに對しての日本の識者の考が當を得てをらなかつた。日本で小說といへば、德川期の末路までは一の玩弄物で、今日尊敬される如くに、藝術品など云はれるとは思ひもよらなかつた。今の坪內逍遙氏が大學の文科を卒業して文學士といふので文壇に立ちいろいろな小說を書いたが、それに對して當時の時事新報（これは云ふまでもなく當時の文明の隊長福澤先生の率ゐてゐた機關新聞であつた）が、如何にこの坪內文學士の著作を評したかといふに、著作その物の出來榮を評するよりも、一體文學士ともいはれる者が、小說に指を染めるとは如何にもその意を得ぬ。斯の如きは學者の品位を傷けるものだといふて盛に攻擊を加へたことがあつた。文學といふものが理解されてゐなかつたことがわかる。

當時日本第一の新聞といはれた東京日々新聞は、世界の文明に通じてゐる福地源一郞、岸田吟香兩氏の主宰の下に出版したものであつたが、最初の頃は小說を載せるといふ樣なことはなかつた。勿論どの新聞もその創刊の頃は小說などを載

せる餘地などはなかつた時分でもあつたし、またこの日々新聞はよほど進んだものであつたわけであるが、その發達してゐた東京日々すら小說を載せなかつた。何故かといふに福地氏は、一體新聞は生きた事實を報告するので、そんな架空の娛樂に屬する閑文字を載せるべきものではないと云つたが、何ぞはからん、その福地先生は晚年にいたつては自から小說家となり、脚本家ともなつて名聲を馳せた人であつたのに初めの頃は斯樣な狀態であつた。畢竟初めは小說を藝術品と見なかつたのであらう。

當時、戲作者といふものがいくらか幅を利かしてをり、傳統的な習慣を維持してゐたのである。例へば假名垣魯文といふ人は、古い脈をひいた最後の戲作者ともいふべき人であるが、戲作者となつて世に立つためには一度はこの人の門をくゞらればならなかつたのである。卽ち師弟の關係を結んで、魯の字か文の字を頂戴してそれを名につければ文壇に立てぬといつた風な習慣が存在してゐた。そんな風であるから、小說といふものが重んぜられなかつたのも無理はない。

一面には原書の小說が讀まれ、その道に於て達人といふやうな人も可なりにあつた。例へば金子堅太郞氏の如きは、頗る此道の達人であり、また早稻田大學總長高田早苗氏の如きも早くより西洋の小說に指を染めた。寧ろ坪內逍遙氏よりも早かつた位であり、此外磯野德三郞氏だの、自分とは同窓であつた丹乙馬（英語に於ては天才であつたが、不幸夭折した）などは非常に西洋の小說を讀むに達者であつた。

又此頃漢字の素養のある人によつて小說が飜譯され或は飜案せられて世上に現れた。末廣鐵腸の「雪中梅」とか柴四郞の「佳人の奇遇」矢野文雄の「經國美談」といふやうなものが續々出てきた。そこで一槪に小說を排斥することも出來ず、玆に文學價値が追々と認められるやうになつた。

がやうに小說を藝術品と認むるやうになつたに就いて、此處に初めて玩弄物と同樣に見られてゐたものが相當の價値のあるものと見做されるやうになつた。

當時、古い小說類のうちから、四大奇書を選んで新聞紙に標出したことがある。それは馬琴の八犬傳、一九の膝栗毛、種彥の田舍源氏、春水の梅曆であつた。この外に西鶴もあり近松もあり芭蕉もあるけれども、兎に角玩弄物扱ひとなつてゐたものを大奇書と考へるまでに至つたのは一進步であつた。

一四

文學上の話の序に少しく明治初年の教育上のことに觸れて見たいと思ふ。何しろ勅語に「廣く知識を世界に求む」とあるに基き、維新の草創は何も彼も外國より求めた。其の爲にあらゆる方面に外國人を傭ひ入れた。例へば學校に就いていふと帝大の如きは何十人といふ外人が來てゐて、私立でも外人の聘せられてゐない所の無かつた位で、隨つて英語を學ぶ學校が盛んに各所に起つた。外國語學校の如きは云ふまでもなく各國語を敎へたものであるから各國の外人が聘せられた。その他、政府のいろいろの事業について、顧問とか技師とかいふ格で聘せられたものは各部に甚だ多かつた。

これら多くの外人のうち、何れの國人が最も多かつたかと云へば、勿論英、米、これに次ぐものが佛で、それに次いで獨、伊、などで、各々の專門によつて來朝したのであつた。

日本の文明は、そこに線を劃して區分することが出來るならば、明治に入つて外人の感化を受けたこの時代を以て劃すべきであらう。而もそれは殊に、他國人よりも多くの人々の來朝した英米に負ふところが多いのである。

當時の教育制度は今日のやうに劃一制でなかつた。隨つて學校は其性質により思ひ思ひのことをやり甚だ自由であつた。それ故學校には特徵があつた。例へば官立の學校にしたところで帝國大學はおのづから帝國大學の特色があり、工部省で設けた工部大學は、おのづからそこに工科大學としての特色があつた。また司法省が設けた法律學校も、帝國大學の法科とは異なる所があつた。その他北海道の農學校も亦一特色を持つてゐた。それだからそれぞれの學校より生れた人物にもおのづから特徵があつて、現今に於けるが如く、何處から出た學者も似たり依つたりと云ふごときものでなかつたのである。その是非の論は且らく措き兎に角當時と現今とは大いに相違があつた。

當時學校は正則を主とした。隨分極端に外國の制度を採り何も彼も外國に倣つて、宛がら外國の學校を日本へ移して來たやうの趣があつた。無論今日の如く國語漢文などで多くの時間を取るやうなことはなく、中學程度の學校でも、敎師は外國人が多數を占めた。日本人の敎師はほんの補助としてゐたに過ぎなかつた。また外人の敎授振も彼等が本國に於て本國人に敎へると少しも變はることがなかつた。故に中學程度の學生も敎室では日本語は許されなかつた。よしんば許されたとしても外人相手に日本語を使つても解らず、曲りなりにも洋語を使はねばならなかつた。

高等學校に相當する大學豫備門あたりには多くの外國敎師の外に日本人の敎師も居つたが、それらも敎室では洋語で敎へた。從つて生徒も洋語で應答をせねばならなかつた。そんな譯から外國語は今日よりも幾倍も進んでゐた。

中學時代から高等學校に相當する豫備門に於て、飽くまで外國語を叩きこんで、大學に入るのであるから、その頃の大學の卒業生は、今のと較べて外國語の造詣に於て甚しい相違のあるのも故あるかなだ。當時は何んでも彼でも外國に摸倣した。其の摸倣のため、弊の生じたこともあつたに相違ないが、教育制度の外國摸倣に、大なる效果を收めたものは蓋し外語の熟達であつて、文化草創の場合、これ丈は後年よりも誇るに足るものがあつたと云ふてもよからう。

一五

學校の話に關聯して、少しく當時の外國の敎師のことにも及んで見たい。自分が敎を受けた外人だけでも記憶にあるものは、十數人もあるが、それらの人々を記憶から呼び起して見るのに、忘れ難い外國敎師が三四人ある。大學文科の敎授として英文學を敎へた人にホートンといふ人があつた。英國人で品格のよい相貌の人で、何でも貴族の系統だとか云ふたが如何にも溫厚な紳士であつた。この人が英文學の「クラシック」を集めた文集や、シエクスピヤの作を講じたのである。氏は頗る眞面目な人で、なかなか敎授振も懇切で、その態度は常に嚴肅莊重で笑ふことも怒ることもなかつたので、學生は深く此人に尊敬を拂つてゐたものである。

この溫厚なる敎師に對して吾々學生が無遠慮を極めたことを思ふと、氣の毒だつたと思ふこともある。笑話の一二をあ

けると、教はつてゐる文集のうちにエドマンド・スペンサーの結婚の詩があつた。その中に閨房に入る一段が、原書には全文が載つてあるけれども教科書にはそのところが省いてある。そこで學生等は圖書室に入つて省かれてゐる處を調べておいて、先生にこの所はどんなことがあるのだと質すと、先生頗る眞面目に "You may guess" と云つて答を避けた。先生は微笑も湛へないので學生連は二の句が次げなかつた。

いまひとつこの先生に就いてのエピソートがある。この當時大學には實地演習といふものがあつた。土木に就いて云へば橋を見に行つたり、植物學の學生ならば草の採集に出かけるといふことがあり、法律では實地の訴訟傍聽に出かける樣のことがあつた。然し文科に於ては、實地演習のため、外へ出る樣な事が全く無かつた。ところが或る時橫濱に外人が沙翁劇を演ずると云ふを聞いたのでホートン先生に、平生講釋を承たまはつてゐる劇の實地を見たいから橫濱へやつて貰らひたいと談判に及んだ。この時は先生も贊成され、早速總長に交渉されたが、加藤弘之總長はそれは成らぬといふて拒まれたので、ホートン先生は氣の毒さうに學生等に申譯をされた。これはあながち學生の惡戲ではなかつたが、先生には氣の毒であつた。

* * * * * * *

その他になほエドワルト、モールスといふ動物學者があつた。動物學などは受けのよくない學科であつたが、このモールス先生は非常な人氣を博した。といふのはその人が如何にも面白い人で、日本に理解があり、親しみやすい性格の人で、講義が面白く、それがは半ば言葉で半ば繪であつた。先生の黑板に描く繪は實に妙を得たもので、五色のチョークで黑板に説明がてらにかく禽蟲は瞬く間に出來るが、先生はいつも左右の兩手を同時に使つて蜻蛉の羽翅を描いたりして、如何にもそれが達者で黑板の圖を消すのが惜しいと思はれるやうであつた。動物學のやうなものに興味をもたせたのは全くこの人のお蔭である。氏は日本に深く趣味をもち、日本の貝塚を掘つて考證を加へたり、陶器を研究したり、謠曲を習つたりした。

なほ爰に逸す可らざるはフエノロサ先生である。氏は米國の大學を卒へると直ぐに日本に來たのであるが、この人の頭

腦は如何にも明晰で、この人に一度教はると、深い印象をのこした。この人は大學に多く重要な課目を擔當し、哲學、社會學、經濟學、政治學の如きは皆な氏の擔任であつた。その教授法は本を讀んだり讀ませたりするのではなく、講義の草稿を自から作つてそれを筆記させたもので、それが簡にして要を得たから學生の頭腦には深く入つた。氏は日本在留中美術に就いて深く研究を重ね日本美術を大いに發揮したことは誰も知る通りである。

外國教師のことを思ひ起すとまだいろいろあるが、大體に於て當時日本に傭はれて來た學者は立派な人が多かつた。併し多少の例外もあつて、隨分こまらせた外人もあつた。自分の鄕國新潟學校へ聘されたキングといふ外人のごときは其一人である。此人の經歷は忘れたが、極めて人格の低い人で學生からも輕蔑を以つて迎へられた。ある時此人に就て一椿事が起つた。ある朝キングの云ふには、昨夜自分の寢所を襲ふて自分を殺害せんとしたものがあると言ひ出したので、大騷ぎとなつた。縣廳では大いに狼狽して、二日間新潟市民に禁足を命じて嚴重に調べた。ところがその結果、キング自身の芝居で償金を得んための手段であつたことがわかり、キングを解傭することに至つた。

一六

爰に亦ダンといふ米人を石油事業に傭ひ入れて大失敗をやつた一話がある。之れを傭ひ入れた人は、石油史に名のある石坂周造といふ人であつた。この人は幕末の慷慨家で、首を切られるところを逃げてやつとのことで命を完うした人だが、この人が明治の初年に相當の資本を集めて、信州に石油の會社を設けた。そこで誰を技師に賴んだかといふと、函館にゐた米人ダンといふを技師長に傭つた。ダンは多少の學問はあつたが、石油にかけては全くの素人で、米人だから多少石油のことは知つてはゐたらうが、無論採掘の法などは知らなかつた。それを技師長に賴むのも亂暴だが賴まれるものも亦亂暴である。而も一年一萬圓といふ、當時に於ては莫大な給料を以て三年間の契約であつた。然し實際に於て少しも成績が

あがらなかつた。それ故雇を解かうとすると、契約があるから三年分の給料を出せといふ。一年も經過せず、成績もあがらぬのに三ヶ年分の給料を出せとは不當であると、遂に裁判沙汰になつたが、その訴訟は石坂の敗訴に歸した。今から見れば當時外人に對する法權が弱かつた爲、外人に勝を與へたのであるが、併し會社に於ても弱點があつたといふ譯は、この會社に參加した者は多くは公卿華族などであつて、其の家扶や家令が勝手に共同した氣味もあるので、訴訟沙汰となつては、主人に對して面目がないと云ふて、家扶が切腹した者すらあつた。コンナ內方の事情があるので或る筋から三萬圓足らずの金を出してヤット治めたことがあるが、ダンは後に公使になつて來た人に不似合に人格はあまり良くなかつた樣である。

此頃外人の人選を誤つて意外の失敗をした例は以上に止まらないが、當時の事情は何も彼も外人に依賴し、外人萬能主義で、外人は何んでも知つてゐるものと妄信した爲めに間違も起つたのである。外國の宣教師から兵法を教はつたりした時代もあるから、思へば無理もないことが、今から見ると實に滑稽千萬である。

賴山陽の人氣のある所以

市島謙吉

館藏 大正十年六月 留

前月賴山陽先生の鄉國廣島の諸先輩に御招きを受け、拙著「隨筆賴山陽」に就き、短時間雜談を試みたが、その後筆記が手元に回つて來て、雜誌に載せるから校閱せよといふことであるので、ムゲにおことわりも出來かねた、さりとて支離滅裂の雜談を雜誌に揭げるのも困るところから、匆卒一稿を草して、雜誌に投ずることにした。

私が長い間山陽先生の事績を取調べ、多方面に涉つて材料を蒐集した、經驗の一端を云ふて見ると、山陽の逸事の案外に多いのに驚かざるを得なかつた。山陽に關して其の傳や逸事錄の類は既に多く世に出てゐるが、それに漏れた雜事は少なくない、「拙著隨筆賴山陽」に收めた事實の七分通りは、これ迄の成書に逸したものであるが、まだ搜したら隨分澤山に出てくるだらうと思はれる。凡て人の事績はその鄉國若くは其の居住地或は其の旅行の地などに存するが通例である。山陽に於ても廣島や京都に於て多くの遺蹟があるのは言ふまでもない、又しば／＼往返した中國筋に色々の事が傳つてゐる。これは寧ろ當然のことであるが、その人に餘り緣因の無い地方にも少からず其の逸事を發見する、例へば自分の鄉國越後は山陽の曾つて足を蹈み入れない所であるが、そこですら搜して見るといろ／＼の材料が見出される江戶には山陽が遊んだことはある、それは若かい時であつて多く材料があるべきでないのに、それにも拘らず、關西に比して敢てヒケを取らぬほどの多くの逸事を發見する、北海道の僻陬に至るまで逸事の

存在するのを見ると、殆ど全國に滿遍なく亙つてゐるかの感がする、畢竟山陽の墨蹟が珍重せられて方方にある爲めにおのづからそれが事蹟を語りもするが、山陽の門人や門人の又門人などの全國に散在してゐる所から自然山陽の事蹟を傳へる譯でもあらう。一代の文豪にこれほどの事があつても不思議はないけれども、實は山陽ほど材料の多い人は恐らく無からう樣に思ふ。山陽の筆に成つた斷篇零紙と雖も重んぜられて丁寧に保存されてゐるは勿論、山陽の事と云へば咳拂をした瑣事でも談柄とされる、到る處に山陽が談話の種となつて人の興味をそそり、上は王侯貴人より下は車夫馬卒に至るまで此人を喜ぶの概がある、山陽ほど人氣のある人はない。あらゆる階級に通してこれほど人氣のある人はない、亦これほど長く人氣の落ちない人もない、政治家や宗教家や武將などとて長く人氣に投じ百代忘れ難い人氣物はあるが、一個の漢學者でこれほど人氣のある人は恐らく他に無からうと思ふ、斯く人氣があるから普通の場合埋沒して湮滅に歸する樣な事でも、それが話頭に上つたり、書き散らしの反故ですら大切にされるのである。多くの人は山陽が勤王論の主唱である、日本外史や日本政記の感化は、維新の形勢を作るに與つて大なる功績がある、山陽の上下に喜ばれるのは、此故であるといふのが、成るほどそれが主なる原因であらう。自分はこれに對して、決して異論を唱へるものではないが、併し原因は決してコンナ單純なものではあるまいと思ふ。山陽のあらゆる方面に氣受けのよいのは、其性格にも依り、其の藝術の特徴にもよるものであらうと思ふ。山陽は若い時鄕國を脫していろ〳〵辛酸を嘗めた苦勞人である。隨つて人間の情味を知る解人である通人である。漢學者に通有する野暮な人でないことは、一通の手紙を見ても直ちに首肯かれる。山陽は尺牘を作るに空前の妙手と云はれてゐるが、その然る所以は、能文

能書にも依らうが、人情の琴線に觸れてゐるからである。漢學者の言草はいつも唐虞三代などを理想として唐人の口眞似をするのが例となつてゐるが、山陽は擬唐人たるを屑しとしないで、必ず實生活に觸れたことを云ふて居る。多くの日本歷史は支那の左傳などに成る丈近からんことを欲し、模倣をつとめてゐるから、日本の面目が一向發揮せず、我が歷史を支那人を傭ふて書かせた樣な風があるが、山陽はこれを排して一生面を開いた史筆を揮つてゐる。支那崇拜の盛んであつた當時此新體の文を臆面もなく縱橫に遣つたのは、云はば冒險事業とも云ふべきだが、山陽はどこまでも自家の見識で有りの儘日本を描寫するにつとめた。繪畫に譬ふれば、山陽は貴族の一階級にのみ持て囃された狩野や土佐に據らず、浮世繪式の筆を揮つた。浮世繪が國民的藝術として永い間社會全般にわたり普遍的薫陶を及ぼしたと同じ樣に、山陽に至つて初めて國民的歷史が世に現はれた戀古守舊の漢學者は當時山陽の文を彼是非難したのは、浮世繪が其隆盛時代に或る貴族的階級に卑められたと同樣であるが、浮世繪も今は眞價を認められたと同じ樣に山陽の日本の外史も益〻光りを放つて國民必讀のものとなり、他の多くの日本歷史は皆高閣に束ねられてゐる。德川時代の漢學者範圍で許すにナショナルの冠詞を以てし得る人は山陽を除いて幾人あらうが、山陽は若い時分或る不謹愼で父母や先輩を煩はし、隨分瑕瑾の多い人であることは爭はれぬ。併し人間として瑕瑾の無いものはない。山陽の人間味は寧ろ此の邊に在りとも云へるであらう山陽は往くとして可ならざるなき才人であつた、斯樣な人は或る苦しき窮遇に立つと、終生恢復の出來ない邪徑に墮ることもあるものだが、山陽に於ては流石に數奇と闘つて巍然操守を變じ無かつた。山陽は苦勞人で人をそらさぬ才を持ちながら、傲岸で權貴の人に膝を屈しなかつた。彼れは文を賣つて生活し、

一生官祿を食まなかつた、隨分口や筆で言ふ所は立派でも、暮夜權門に哀を請ふ樣な族が多かつた時代に、彼れは昂然として獨立を維持した。此の氣象は京都文人に甚だ乏しい、上方文人で江戶兒氣質を有した稀れなる例は山陽であらう。彼れの稜々たる氣節が其文章と相俟つて幕末の志士を鼓舞作興するに與つて力あつたことは云ふまでもない。

山陽が有識階級に喜ばれて、其の人氣のある所以は、上述のことは多く言說を費すまでもないと思ふが、その如何なる階級にも人受けのよい原因に就ては、更らに多少の說明を要すると思ふ。山陽の京都に在つた頃は風流韻事の盛んな時であつた。隨つて多方面の趣味家も多く輩出した。ひとり山陽を擧げてその隨一と爲す譯ではないが、山陽も確かに多方面に涉つた趣味を解し、餘技の見るべきものが多かつた詩書をよくしたは勿論、畫もかき、篆刻も出來、書畫の鑑定もやり、骨董にも鑑識があり、平曲も語り煎茶にも通じ亦酒も解した。勿論是等多方面に涉つた餘技が皆堂に入つたとは云へぬが、書にしても畫にしても篆刻にしても、流石に山陽特有の風韻があつた。書も同時代に山陽以上の能書があつたに相違ないが、山陽の書は如何にも人受けがよい。氣品もあれば風韻もある。專門書家を始め能書家を壓倒してその時價の益〻昂騰する所以は、山陽の人物崇拜も手傳つてゐるであらうけれども、一は萬人受けのする書風であるからである。畫も素人離れをしたとは云へないが、他の企て及ばない風韻のあるのは其の文藻氣魄の筆端に遡る仕業で、他人の及ぶ能はざる所がある。彼れは自ら他をかくよりも、畫を評し且つ鑑定眼を持つてゐた。竹田其他も山陽の評なれば、皆甘受した位ひである。併し是等の餘技は當時の文人で山陽以上のものも少なくなかつたのだが、何といふても山陽に及びがたいのは、文章が縱横であつて、山陽

は是等多方面に涉る諸般の趣味を序跋や題贊や識語に活用した。實を云へば風流の趣味があつても筆は之れに伴はず、筆のある人は趣味を解しないといふ鹽梅で、畫に題する贊や骨董などの記で、漢學者の筆になつたものは、唯文字を竝べたに過ぎぬものが十の八九を占め、山陽のことごとく其物をよく理解して、かゆい所へ手の及んでゐるものは無いのである。山陽の餘技は堂に入るほどでなくとも、それが文藻を一層豐かにしたことは爭はれぬ事實である此點に於て山陽は確かに風流界の第一人者である。卽ち山陽は其餘技に於ても信者の藩圖を廣めた。書畫骨董を玩ふもの、煎茶篆刻を事とするものなどに喜ばるるのは決して偶然でない、あるものは酒客たる山陽に私淑し、甚だしきは遊蕩時代の山陽に藉口して磊落豪放を極めこむものすらある。要するに山陽ほど手廣の信者を有してゐるものは無い、此點から見ると、山陽は廣島に生れたが廣島の人でない、京都に住つたが京都の人でもない、彼れは日本全國共有の名器であらねばならぬ。彼れは國民の寵兒である、彼は國民を指導もしたに相違ないが、之れを國民の師表などと持ち上げるには、餘りに人間味が勝過ぎてゐる、寧ろ畏敬すべき國民の親友[redacted]と
か[redacted]する方が穩當であらうと思ふ。

アイドル扱をして崇拜する

番地改正論

＝帝都復興に關する一希望＝

市島謙吉

（一）

大震災が帝都に災して、其八九分通りを滅した、其後應急の設備は成つたが、まだ復興にまで至らない、住宅の如きも本建築をやつたものは幾許もなく、滿目バラック建の家屋は慘憺たる光景を呈してゐる。帝都の復興までには、猶數年かゝるであらう。此際善後の方策に就て講究することは大切である、從來帝都に就て感じたいろ〳〵の不便不利の事は此復興の場合に改めなければ他日奈何ともしがたい、此の復興の場合が帝都百年のため改善の好機會である、地區も道幅も下水も此序に改めなければ、改むべき機會が將來にない、何人も復興に就て多少の意見のあるは當然であつて、自分もいろ〳〵の私見を持つてゐるが、こゝには比較的瑣細な一問題に就て言ふのみである、それは番地改正論である、これは年來の主張であるが、今度の樣な場合で無ければ、之れを實行することが出來ないから敢て珍らしい說でもなく、面白ろ味のあることでもないが、爰に聊か主張を書いて見ようと思ふのである。

（二）

東京の番地は住宅と言はず店舖と言はず、頗る入り亂れてゐる。例へば三十番地の隣りが三十一番地であるべきだが、それが動もすると頗る飛び離れてゐて、餘程隔つた處にある樣なことが珍らしくない、初めて人を訪問する場合などで、其番地はハッキリ知れてゐても、其番地を捜がすにひどく骨が折れ、近邊の民家で聞いたり交番所に尋ねたりして、可なりの時を潰してヤット尋ね當ることがある此不便は誰れも感ずる所で今更架說を要しないと思ふ、今日は電車も縱橫に開け自動車の設備も相應に進んで來たけれども、番地が入り亂れてゐるために、人を尋ねる段になると、其の家の附近でマゴツキを生じ、これが爲め無駄な時間を費すことが少なくない、此のマゴツキを豫想し、みづから捜索することを厭ふ者は、始めから電車に乘らず、自分の宅を出る時人力車を傭ふ位で、初めて尋ねる家は分りにくいことになつてゐる、此の面仆は主として番地の錯綜に原因するので之れを改めなければ、いくら市內の交通機關が改善されても、其の便利は此の障碍

春城雜話（一）

市島春城

山陽は何故に人氣があるか

萬人に親しまるる頼山陽

古來頼山陽ほど人受けのよい儒者は無い。其の作品は時を過ぐる程世に持て囃されて、殆んど冷熱無く、今日にては山陽の揮毫した物は空前の價を保つて居る。其の筆蹟は如何にも廣く行渡り、殆んど全國に分布されて、山陽の曾て足を踏入れたことの無い所に迄及んで居る。而して山陽の書いた物は、金持にも貧乏人にも喜ばれ、老人にも若い者にも愛されて居るが、其の愛され方が、他の先哲の愛され方と、大に異なつて居る。たとへば空海とか、眞淵とかいふ人々の作品は、之れを愛する者の範圍が甚だ狹い。且つ之れを愛する者の心持は、愛するといふよりは、寧ろ尊敬するといふ方が主になつて居る。然るに山陽の作品に對しては、何人も親しみを以て之れを愛翫する。他の、書などを書く人の作品には矢張り親しみを以て愛されて居るものも少なくないが、それは書である爲めに親しみ且つ愛されるのである。山陽に於ては、書も無い譯で無いが、其の書はいはゞ素人書であつて且つ其の數が極めて少ない。今日殘つて居る山陽の筆蹟は大部分書であるが、其の書が非常の親しみを以て萬人に愛賞されて居るのであつて、かゝる例しは殆んど山陽のみに見る

所と云つてよい。

山陽と日本外史

斯様に山陽がいつ迄も人氣を有して居るのは何故であらうか。山陽の著はした日本外史が、大に時勢に投じて、幕末の風雲を皷吹する上に力のあつたことは、いふ迄も無い。山陽の名聲が其爲めに大に揚つたことも、疑ひ無い所である。併しながら山陽の名聲が、日本外史の著述あるが爲めに、いつ迄も持續して居るものとは思はれぬ。成程、山陽は日本外史に勤王論を寓して、天下の志士を皷舞し、倒幕の後援を成じたに相違無いが、今日は時勢一變して、敢て日本外史から勤王論を聞く必要も無い時代となつて居る。して見ると山陽の書いた詩だの、書だの、畫だのが手廣く持て囃さるゝ譯は、強ち山陽が日本外史の著者であるからだといふやうな、單純な理由に依るものではあるまい。

國民的文藝家たる山陽

愚按では、山陽の作品には民衆に喜ばるべき素質がある。言ひ換ゆれば、山陽は國民的文藝家であるが故に、廣く、長く一般から歡迎せらるるのであると思ふ。日本外史が今日尙ほ讀書子の愛する所となつて居る所以も、やはり其の歴史が國民の嗜好に投ずるやうに書かれて居るからである。山陽は外史を著はすに就て、一種の新しい文體を工夫した、それが丁度國民の嗜好に適する文體であつたのだ。それより以前の歴史家は、日本の歴史を書くに當つても、無暗に支那の文章の眞似をした結果として、其の書かれた歴史は恰も左傳でも讀むかの如く、丸で日本味のないものであつたが、山陽の外史は何處迄も日本歴史の體を得て、一頁讀んでみても、直に日本の味を會得することが出來る。全體、新體の文章を工夫すると、いつも非難の起るものであるが、此の外史の初めて世に出た時も、漢學者の方面から盛んに非難を受けたものである。山陽が此の新體を工夫したのは、恐らく司馬遷の史記に學んだものであらう。司馬遷も史記を著はすに就ては、一種新體の文章を創め、史實の編成に關しても、既往に無い工夫を施したので、矢張り當時非難が少なくなかつた。漢書の著者が司馬遷を非難したなどは、著名な事實であるが、併し一時非難はあつても、後に至つて、史記は不朽の書と稱せられ、今日にては、史記こそ西洋の歴史の體を得て居ると云はるゝに至つた。日本外史に

於ても亦之れと同様の趣があつて、今日最も廣く讀まるゝ漢文の歴史はと云へば、第一に外史に指を屈せねばなるまい。其の廣く行はるゝ所以は、繰返すやうではあるが、其の書き方が國民的であるからである。

惡文の模範とされた日本外史

日本外史の文章は宛がら五彩燦然たる錦繪を見るが如くで、其の描寫の仕方は頗る妙を得て居る。書中に記された英雄の行動でも、戰爭の記事でも、軍書を讀むよりも、遙かに生彩があり、又興味がある。併し當時の漢學者は多く支那古代の文禮を尙んだため、日本外史は之れに外れて居るといふので非難を加へ、聖堂では惡文の標本として、ある部分を抄出して、之れを學生に直させる材料にした程である。繪畫の方面に於ても、其の時分は尙ほ狩野土佐にあらざれば繪で無いものゝやうに思ふ者が多かつた。それと同じく文章に於ても、支那の古文を模倣したもので無ければ文章でないと信ぜられて居たのである。さういふ時代に、突如として新體の文章を發表したのであるから、山陽の日本外史が學界の非難を浴びたのも無理は無い。

日本外史と浮世繪

畫界に於ける土佐や狩野といふものは、貴族階級に喜ばれた畫であつて、國民的のものでは無かつた。浮世繪は市井の俗畫として排斥されたものであるが、實は其の排斥された俗畫こそ、眞の意味に於けるナショナル・ピクチュアーである。今日になつて浮世繪が大に地歩を占めて來たのは誰も知る通りで、畢竟國民的繪畫として一般に認められ來つた結果に外ならぬ。日本外史の文章は、此の浮世繪にたとふべきもので、其の事實を寫實的に寫して、何人にも讀み易く、解し易からしめた點は、丁度北齋や豐國の業を文章の上に試みたものと言ひ得るであらう。又、其の論賛になると、慷慨の氣が漲つて、懦夫をして覺えず起たしむるの力がある。是等の點に於て、日本外史は國民の師となり、友となつて、之れを指導し、激勵して居る趣ありといふべきである。

經學に暗かりしは山陽の仕合せ

一體、山陽は學者といふには、餘りに經學に暗かつた。山陽は才の人であつて、學の人ではなかつた。併し經學に暗かつた丈け、それ丈け其の拘束を脱して、

縱横天稟の才を馳せることが出來た。若し山陽が後ればせに經學者となつて、力を其の方面に用ゐたならばどうであつたらうか。遠い過去は兎に角として、山陽の時代に於ては、經學といふものは、國民文藝家に取つて既に餘り必要のもので無くなつて居た。若し山陽が經學の造詣深く、經書の註疏に沒頭したとすれば、あの位の天才を有して居ても、恐らく遂に一學究となつてしまつて、自然種々の束縛を受け、縱横の筆を揮ふことが出來なかつたことゝ思ふ。元來、經學者といふものは、多くは文章に拙なるものである。山陽のやうな氣の利いた文章は、到底經學者に望み得べきもので無い。畢竟山陽は、經學に暗かつた爲めに、却つてあのやうな氣の利いた文章を書くことが出來たと言ひ得るであらう。山陽の文章は如何にも學者ばなれがして居て、腐儒の臭[illegible]が絶えて無い。そこが又國民の嗜好に適した所以である。

山陽の手紙

山陽の手紙に至つては、色々の意味に於て古今獨歩と云ひ得る。それは稀世の文才にも依ること勿論ながら、一は又山陽自身が通人であつたからだと思ふ。山陽は若い時分に遊蕩生活をして、勘當を受けたり、貧乏をしたり、具さに世の酸味を嘗めたから、其の手紙に現はれた片言隻語にも自ら人を外らさぬ妙がある。滑稽もあれば、諧謔もあり、間々俗な事も書いて、人情の至微に觸れて居る。さうして野卑に落ちずして、相當の品位を保ち、金を借りる場合ですら、尙且つ自己の地歩を占めて居る。此んな手紙の書きぶりは、到底經學者などの企て及ぶ所で無い。山陽の手紙は、其の存命中に於ても、一般に珍重され、友人ですら之れを大切に保存したものがある。其爲め山陽の手紙の今日に傳はつて居るものは非常に多く、自分の寓目したもの丈けでも五六百通に達する。若し全部を寄せたらば幾千通といふ多數に上るであらう。斯樣に珍重され、保存さるゝ所以は、山陽が高名な文人である爲よりも、其の書き振りに得も言はれぬ面白味があるからである。山陽は確かに手紙の文にも、獨自の一體を創めたものと言つてよい。山陽以前に於ては、久しく支那風の形式に拘泥した手紙の體が行はれて居たのであるが、其の形式を破つて、情味本位の、氣持のよい手紙の書き方を敎へたものは山陽であると云はねばならぬ。

山陽の手紙は正に通人の筆であつて、國民用書簡の軌範となすに足るものである。

山陽の書風

山陽の書風について見ても、又國民的であると云ひ得る。晩年の書は殊に熟したもので、優麗の感が深い。能書ではあるけれども、書家の臭氣が無く、又志士的の粗豪な所も無い。何處と無く氣品があつて、流暢を極めて居る。云はゞ萬人受けのする書で、誰れが見ても氣持よく感ずる。其書が近來空前の値を生じて來たのは、全く何人にも喜ばれる書風であるからで、此點も亦廣く國民の嗜好に投じて居るものと言つてよい。

多方面の趣味家

山陽は如何にも多方面の趣味家であつた。此の多方面の趣味家であつたといふ事も、亦種々の方面に人受けのよい原因をなして居ること、思ふ。山陽は書畵や骨董に鑑識のあつたことは勿論、煎茶もやれば、酒も飮む、印を彫つたり、盆栽を玩んだり、平家を語つたり、芝居を好んだり、實に其の嗜好は有らゆる方面に及んで居た。此の多樣の趣味は自然文章の上にも現はれ、從つて其の文章には他人の及ばざる趣味を生じて來る。だから風流を喜ぶ人達は、どうしても山陽を喜ばざるを得ぬことになるのだ。書畵の題識とか、骨董の記文とか、それが山陽が書けば重きを成すといふのも、山陽が其等の趣味に深く通じ居り、之を讀めば何人といへども首肯せざるを得ぬからである。之れが又山陽の廣く持て囃さるゝ一原因であらう。

山陽の人間味

山陽は人物それ自身が國民的であつた。彼は生涯布衣を以て終り、一度びも仕官せず、高祿を食む如きこと無かつた。彼は布衣ではあつたけれども、一種の見識を持して、役人に阿諛するやうの事は無かつた。彼は飽く迄も國民の典型たらんとした慨がある。併し半面彼は決して無疵の人では無かつた。何れかといへば頗る疵の多い人であつた。此の疵の多かつた事が、頗る山陽の人間らしい所である。若い時分に遊蕩をしたり、勘當を受けたり、逐電したりして、一時は不孝者として擯斥された。併しながら是は若い時には有りがちの事で、どうかすると其れが墮落の種になるものであるが、山陽にありては踏止まる可き所に踏止まつて、晩年大に改むる所あつた。此の若い時分の人間らしい

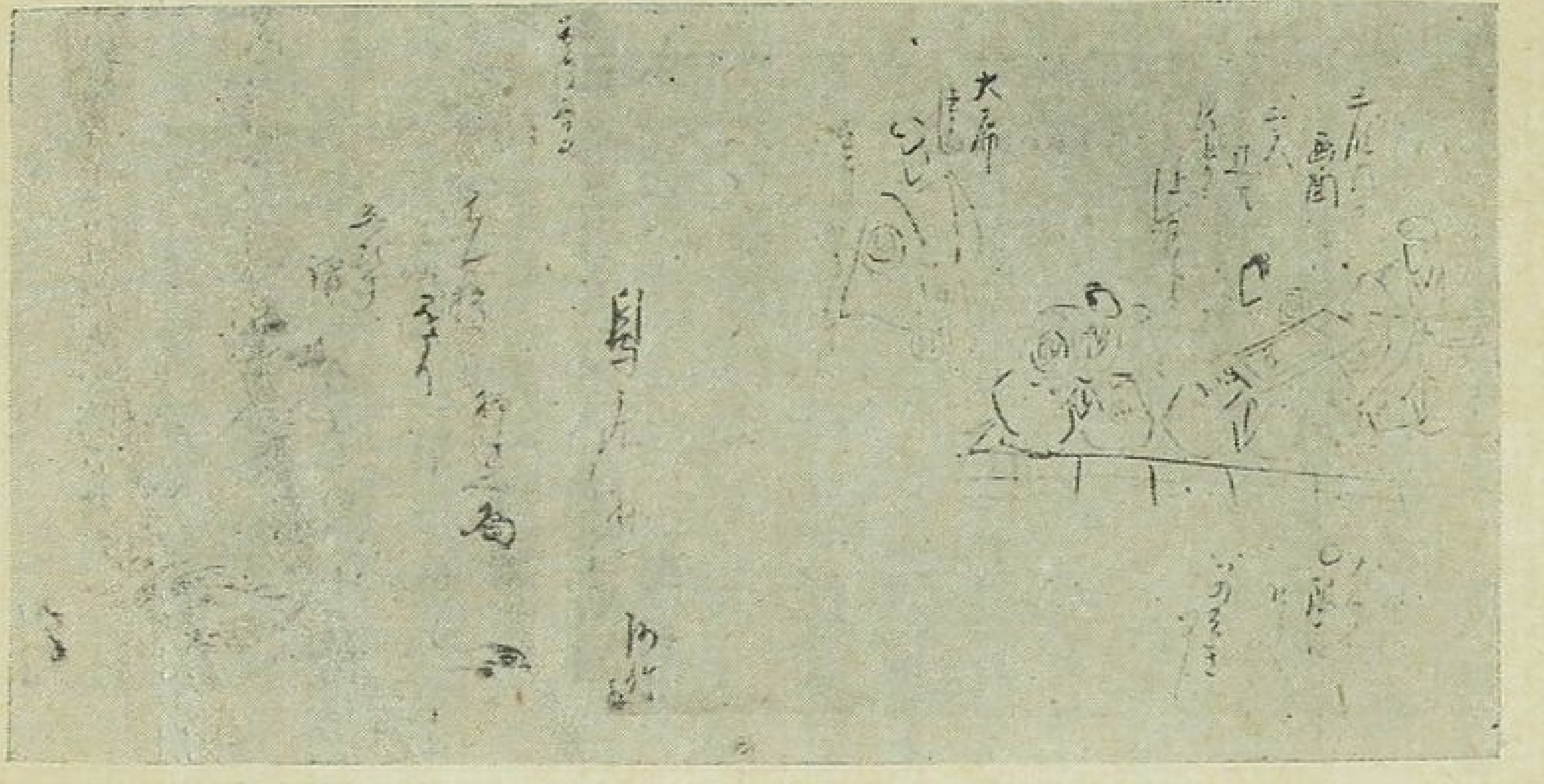
生活から、大に世味を理解したのであつて、卽ち山陽も亦一種の俗物であると言ひ得る。俗物であるから、世俗に同情があるのだ。あの人の人間味のある所が、又一般世人に喜ばるゝ所以であらねばならぬ。

二樣の山陽論

山陽に對しては世間に二樣の見方がある。卽ち山陽を一種の偶像として、其の如何なる疵をも辯護する人があると共に、又山陽嫌ひの一派があつて、其のアラ許りを摘發する人もある。併し其の何れも中庸を得たものと云ふことは出來ぬ。私は山陽を以て、最も國民に親しみのある先輩とするものであつて、山陽に買ふ可き所は、その常識があり、人間味があり、多趣味、多藝で、且つ頗る氣格の高い所にあると思ふ。從て一概に之を崇拜することを非とすると共に、其の若い頃の瑕瑾をいつ迄も叫んで、之を罪することを欲せない。山陽は若い時に素行が修らなかつた爲に、却て晩年の大成を見たのである。尊ぶ可きは山陽の亂行でなく、其の一度び志を立てゝ惑はざる所にあると思ふ。恐らく山陽も之れを以て公平の評として首肯するであらう。

墨國新油田法實施

墨西哥新油田法は愈々一月一日午前零時を以て効力を發生し、墨國政府は同法を直に實施せん事を期して居るが、一方墨國に密接なる利害關係を有する米國石油業者並びに民主共和兩黨政治家は右油田法施行のため一億五千萬磅の巨額に達する米國資本家の投資事業が沒收さるゝ危險を憂慮し、目下國務省に對して米國政府が右法について如何なる方策に出づるやと頻に問合せをなして居る。墨國の右油田法に對してはひとり米國石油會社が之れに反對して居るのみならず、英國系石油會社も米國石油會社と全く同樣の意見を有するものであると云はれて居る。尙國務長官ケロッグ氏は近く駐墨米國大使に引揚げを命ずると共に、墨國への軍器輸出禁止令をも撤回せん事を提議せんとして居る との噂があるが、米國務省は墨國政府が右新油田法により米國資本家の油田を沒收するが如き具體的事實に關する確報を得るまでは何等決定的行動には出ないであらうと云はれて居る。（一月一日華盛頓發電）



河竹默阿彌下繪（右）魯文の猫に題せる狂歌（左）市島春城氏藏

一　森鷗外氏の一ツ橋同窓會幹事に充てたる狂詩長篇

一　川上眉山氏書柬

一　饗庭篁村氏の書簡數通

一　河鍋曉齋の松浦武四郎宛證文
　松浦武四郎より天滿宮へ奉納の額面を曉齋に書かしむるに付期日迄に約を果さば狩野大家の屏風其他の品を禮に與へる、若し期日に至り成らざる時は、曉齋の名を以つて他の畫家に書かせる、それにて苦しからずといふ請書也。

一　福池櫻痴居士の俳諧評論
　角田竹冷氏一派の俳諧に對し櫻痴居士が晩年負けぬ氣で縱橫素人評を下したもので竹冷氏に宛たる頗る長文の書簡也、紅葉の句も多く引かれあり。（畢）

昭和二年五月東方之星掲出

『大隈侯八十五年史』評

はしがき

本誌主幹高須芳次郎氏が編纂主任として足掛五年に亘り眞に苦心慘憺の末に漸く完成された『大隈侯八十五年史』については既に有力な新聞雜誌に續々評評が出た。實は本誌にそれ等を掲げる事は高須主幹に於て固く遠慮したいといつてゐられるが、後の記念のため、强ゐて主幹の御許諾を得て玆に掲げることゝしたのである。左のほかに東京『時事』に市島春城先生の詳評が出てゐるが、生憎、手許にないので、それ丈は他日、機を見て掲げる事とした。（K・M生）

大隈侯八十五年史に就て

市島春城

（一）

大隈老侯の傳記を編纂しやうと發起されたのは、老侯が薨去されて五十日目に五十日祭を施行された時である。其時多數の侯の親近の人々が集り、今は故人となられた元宮内大臣で老侯と鄉里を同うする子爵波多野敬直君を會長に推し、吾々が老侯の傳記を編纂する衝に當る事になつて、こゝに編纂事業が開始せられたのである。此編纂は實は頗る大事業で、先づ材料の蒐集から着手して、筆をつけ始めたのは老侯の薨後約五ヶ月許りの後であつた。全體人の傳記を編纂するに就ては、其人が歿してから直ちに着手する方が良い理屈もあるけれ共、又良くないとする理屈もある。其人を追慕する念慮の盛な時には自然人の氣込もよい譯であるから早速に始める方が良いとも言へる。簡單な生活をしてゐる人の傳記の如きは其人の亡くなつた時から直ちに作るのは寧ろ時機を得てゐるであらう、然し老侯の如く齡を保つ事八十五年の長きに亘り、時代を言ふと幕末から長い明治に亘り、更に大正に迄亘つており、然も其の事績が非常に多般で複雜を極めておる。斯樣の人の傳記を直ちに編纂しやうと言ふことは、或意味では無謀の樣でもある。何しろ材料がそう一時に集

る筈のものでなく、又殆ど三代の歴史に亘つておる複雑な事を研究するにも少なからぬ日子を要するから、其人の墓木の拱するのを待つて徐ろに書くといふのが、寧ろ當を得ておる。然し乍らこゝに遅延を許さない事情があつた。それは老侯は八十五の高齢を重ねられた人であるが故に、老侯の同僚或は友人、それ等の人々の多くは既に多く歿しておるので、今存してゐる先輩は幾人もない。其僅かに殘つてゐる人も皆高壽の人であるから、何うしても生きたる材料を得るには、之等の人によらねばならず、又之等の人の校閲を經る必要もある所から編纂を急にすることは實に已むを得なかつた。

（二）

老侯に就ての材料は天下に滿ちておると言つても宜しい、新聞に書かれておるだけでも豐富なものである。誰も知る如く、老侯の晩年の如きは、全國の新聞は老侯の言論や其他の記事で滿されてゐた樣なものである。かくのごとく老侯の資料は多いのであるけれ共、老侯が誕生せられ、それから身を起して維新政府に仕へられ、維新の大業の爲めに盛な働をされた時代と言ふものは非常に混沌を極めておる時代であつて、あらゆる大切な事業は老侯の肩に掛つて、殆ど老侯が中心人物であつたのであるが、扨其頃の侯は晩年の如く自から種々の事を語つておられぬ。殊に老侯は十三歳から筆を取らぬ人であるから自ら書かれたものは一枚もない。世間に老侯に就ての樣々な出版物はあるけれ共、纏つたものとては一つもなく、且老侯は肥藩の出身で、薩長の如く大なる藩閥出身でない爲に、常に薩長の間に、挾つて非常な難義をせられた。老侯は一面に於て其强大なる薩閥を押へ乍ら大なる活動をせられたのである。其間には其强閥の嫉視を受けてあられもない讒誣を受けたり、種々な誤聞を傳へられて、侯の迷惑された事も少なくない。此混沌時期を取調べて、侯の立場を明かにする事は傳記編纂に就て最も困難とした所である。此時代の維新史其者がまだ立派に出來ておらない位であるから、此間の正しい材料を得

る事は容易でない、侯に就ての種々の刊行物も早い頃のものは杜撰なものが多く、資料となり得るものは案外にすくない。斯樣な譯だから急速に傳記に着手したのは無理であつた。然し乍ら幸ひに非常な努力によつて、多くの材料が比較的短日月に集まり、それが皆諸家の門外不出の書類であるのに特に借覽を許された。尙ほ意外な仕合は大隈家に維新以來各方面から寄せた書翰が非常に多く保存せられておつた爲に、それから得た材料も仲々多かつた、これが何よりの幸であつた。斯の如くにして編纂事業は運んだのであるが、此間には大地震が起り、會長波多野君薨去の不幸もあつた、然し之等の出來事の爲に編纂事業は少しも妨げを受けずに進行したのは何よりの仕合であつた。

編纂が五ケ年かゝつたと云へば、決して短かい間とは言へない。然し乍ら此五ケ年の間に殆ど三千頁の原稿を三度書替へた、或所は四回も五回も稿を改め、既に印刷に附した物迄も誤りを發見した分は全部の組替をしたわけである。三千頁と言ふのは組んだ枚數を言つたのであるが、それを原稿に引き直すと一萬枚以上に上るのである。それを三度も書直すことは仲々容易な事でない、此等の事情から言へば五ケ年は決して長いとは言へない。全體から言へば、殆ど十年を要する事業である。私等は寧ろ良くも之が五ケ年で完成に到つたと不思議に思ふ位である。既往に於て、維新の豪傑連の傳記も種々出來ておるけれ共、老侯の如く元勳中に長壽を保つた人は無い、老侯の傳記は八十五年に亘る長いものである。其上に幅も亦甚だ廣いものである。大抵の政治家は、朝に立つ時には其事績も多いが、野に下ると何も事績を持たぬ人が多くある。老侯は、これとは違つて在朝の時事績の多いのは勿論であるが、野に下つても一日も休む事なく、あらゆる方面に活動を續けられて、朝に立たずとも、國家の爲に人知れず努力して或は外交の衝に當り、或は敎育を初め社會百般の事に就て、始終活動して國民を指導された。隨つて其事業は他の政治家の追隨を許さぬほど豐富で、侯の傳記は既往に比類の無い浩瀚なもので

ある。

（三）

今更事新しく言ふ迄もないが、維新の際の老侯は、殆ど維新の運命を自から擔つて起つたと云ふやうなものであつた。德川氏が倒れて維新政府が起つたが、此政府の最も大切な事業は差向き外交と財政とであつた。財政の方から言ふと、政府は諸外國に對し種々な借金があつて之を處理して行かねばならず、又外交方面から云ふと、維新政府に對して未だ信用を持たなかつた諸外國は遠慮會釋なく新政府に種々の難題を持出した。此難儀を切拔けるに非ざれば維新政府は保てなかつたのだ。然るに當時外交と共に財政に通ずる人とては侯の外は無かつた、侯は事に當つて他人の及ばない膽略もあつたので、至難の財政も外交もよく料理し得たのである。當時傑出した人物は、大久保、木戸岩倉、西郷、三條と言ふが如く、種々あつたに違ひないが、外交と財政の二つに就ては、諸公と雖も長所ではなかつた。然かも此二つの問題が實に維新政府の命脈のかゝる所であつた。それが侯によつて始末せられたと言ふ事を考へると、侯が維新の際に存在したのは實に天祐であつたとも言へる。老侯は長崎に於て外國學問も修め早く世界の事にも通じておられた爲に、維新の文化運動にも急先鋒であつて、新文物が盛に起つたのも多くは老侯の力によるのである。此間の大隈侯傳は維新の文化史そのものである。此の混雜の時に當り、種々の大事件が起つた。征韓論、西南戰役それから十四年の政變などであるが、事件の眞相が世間の謎となつてゐる樣な事が少くない。老侯の强大なる藩閥の間に介在され、始終其の嫉視を受けながら、奮闘された爲めに、動もすれば實相が蔽はれて、あるひは黑白が顚倒して、老侯の功が人の功となつたり、老侯の正しい道を踏んでゐるのが却つて邪道を歩んだやうに言立てられてゐることもある。すべて此等を事實を以つて闡明するのが、此傳記の使命で、維新期には最も編者の苦心が多かつた。

晩年の老侯は何事も自ら語る人であつた。其言

論は實に盛んなもので何に就ても立派な大意見があつてそれが種々なものに書かれてある、從つて晩年の侯の傳記は侯自ら語つておられる。從つて侯の自叙傳の趣がある。侯自身の語られる所を以て材料とするのであるから、これ程確かなものはなく亦興味のあるものはない。しかし晩年に至るまでに面倒な坂がいくらもある、例へば條約改正に當つた事績の如き、一時反對の議論が沸騰し、侯の遭難によつて其大事業が蹉跌し、從つて侯の立場が明かになつておらない、之に就ても正しい材料を集めて、侯の立場を明かにすることが大切で、編者は最も之に力を注いでゐる。總じて編者が苦心したのは侯に關する幾多大事件の實相を遺憾なく發揮するにあつて。蔽はれたことが顯はれたものが少なくない、例へば侯が幾回か內閣を組織せられた其實相に就ても、世間には一向解つておらん、或は近くは日英同盟、對米對支の問題などに就ても、此傳記によつて始めて世間が其眞實を知る事が出來る。從來侯は凡て外交の事に就ては深く口を閉して多く語つておられないが、在野の時でも間斷なく國民外交に努力された事績は極めて豐富で、それが遺憾なく此傳記によつて發表されてある。恐らく之を讀む人は愕然たるものがあるであらう。

（四）

此傳記の編纂に始終當つた人は、早稻田から生れた高須芳次郎氏である。五ケ年の間健康が維持されて、一日も筆を廢さなかつた事が捗取りの爲めに仕合であつた。同氏の文才は自ら定評がある、如何にも文章が流暢で人をして面白く讀ましむるの妙がある。複雜多般な事をよく纒めて、鮮明に人の頭に入れる能がある。財政經濟の如き數字に亘るものは、乾燥に流れて讀にくいものであるが。斯樣な事でも巧みに筆を遣つて人に倦怠を來さしめず愉快に讀ましむる妙がある。全體老侯の傳は、維新史にからみ、明治史にからみ、亦大正史にもからむでゐるので、侯の傳記を書くには勢ひ背景として歷史が出て來なければならない。ともすると老侯の傳よりも一般の歷史になり易い

傾きがある。然し老侯の傳である以上は其體を失はず、飽迄老侯がどこにも現れてゐなければならぬ、こゝが實地に臨んで面倒で、どこにも老侯が躍々として現るゝと言ふ樣にするのは、筆者の頗る難しとする所であるが、幸に此點に於ても遺憾なきを得た。普通一個人の傳は餘り興味がなく、十枚も讀過すると、早く倦怠を來すのが通例である。それは畢竟書方が乾燥であるからの事だ。高須氏に私の感心したのは、これ程の大きな傳記を幾百頁も興味を以て殆ど時の移るを知らざらしむるやうに一氣に讀過せしめる點にある。尙ほ今一つ感服してゐることは材料がよく咀嚼されて散漫でなくどの章でもヲルガナイヅしてよく纒つてゐることである。

此浩瀚なる傳記の原稿が諸先輩に回附されて一々その校閲を經たことも爰に漏らしてはならぬ。或先輩は特に自家に關係のある部分を校閲された向もあるが、武富、矢野の兩氏の如きは大部分目を通され、而かも周到なる附箋を施された。中にも武富氏は全部の原稿を幾度となく校閲せられた其勞を多とせざるを得ぬ。此傳記に對しては、私と中野禮四郎氏が監修と云ふ樣な位置にあつて最善を盡したつもりである。然し乍ら何と言つても、大隈侯の昵近の者が集つて編纂をし、校閲をしたものであるから、之を第三者から見たならば、多少公平を失しておるとか又、觀察が異るとか、材料が足らんとか言ふ樣な缺點は決してないと言はない、又吾々とても之を完全とは思つては居らん、恐らく他日老侯の傳記を何人が又書くこともあるであらうが、少なくとも此の傳は第一稿と見る可きもので、從來あるものゝ內では最も完備に近いものであると言ひ得るであらうと窃かに信ずる。（下略）

—『早稲田學報』所載—

大隈侯八十五年史の印象

大橋圖書館長　坪　谷　水　哉

幕末時代から明治大正に亘り、幾多の大人物を

以下全て

白　紙